

【所感】

長崎市議会議員 筒井 正興

スコットランド（アバディーン市、エディンバラ市）訪問団報告書

・アバディーン市訪問

ヒースロー空港を経由し、アバディーン空港に到着したのは21時頃であったが、空はまだ明るく、ホテルで遅めの夕食をとった。

翌朝、ホテルから徒歩で、アバディーン市庁舎を訪問。花崗岩の重厚な市街地を抜け、歴史を感じさせる市庁舎内のセント・ニコラス・ルームでアダム市長や市議会議長の歓迎を受けました。

歓迎セレモニーの後、市庁舎前から水素バスに乗り、キティブルースターにある水素エネルギー関連施設を視察。再生可能エネルギーの実用化に向けて、先進的な取り組みを行っているもののひとつである。1台あたりのコストが、通常バスが20万ユーロに対し、80万ユーロかかり課題となっているとの説明を受けた。採算面では、まだ実用化にはほど遠い段階であったが、静かな乗り心地の良さを体感することができました。

水素燃料補給所を後にし、長崎市とスコットランドにとって、また、日本の近代化などに非常に大きな役割を果たしたトーマス・グラバーゆかりの「グラバーハウス」を視察した。現地テレビ局などによる取材が熱心に行われていました。

その後、海洋博物館を視察した。グラバーに関する資料、日本にまつわる資料も展示されていた。グラバーはスコティッシュサムライとして紹介されているものの、日本、長崎ほど有名ではないという説明があった。展示物の中に、甲冑をまとった侍があり、刀を差す向きが逆であったため、案内いただいた博物館職員にアドバイスをした。展示を始めたばかりであるとのことで、とても感謝されました。

快晴の下、海岸沿いの昼食会場に場所を移し、アダム市長、アバディーン市議会の皆様との昼食の後、アダム市長にも同行いただき、グレンギリ蒸留所を視察。

ラグビーアカデミーの視察では、トレーニングとリハビリの様子も見せてもらった。若い個々の選手に応じて、トレーナーが効果的な指導や治療を行っていました。

慌ただしかった一日の最後は、再び市庁舎を訪問し、市長主催の歓迎レセプション。タウン・アンド・カウンティンホールで、企業、学生など長崎につながりのある100名を超える方たちが集まっていた。アダム市長が、未来につながる関係を築いていこうという主旨であいさつされた。訪問団は、長崎日英協会など経済界の方も一緒に、今後、経済面など多分野での交流につなげていくことが、今回訪問の目的の一つと考えており、市長のあいさつを拝聴し、心強く感じるとともに今後に向けた可能性を感じた一日でした。

改めて、スコットランドの先人達が日本にもたらした功績やトーマス・グラバーが長崎に与えた功績を再認識する視察でありました。

余談だが、ホテルの外にある喫煙スペースの灰皿は、ホテルの外壁に備え付けられており、石造りの街ならではの一面を感じました。

・エディンバラ市訪問

ホテル到着時、マーク・ドットソンCEOをはじめ、スコットランドラグビー協会の皆様とバグパイプによる歓迎を受け感激しました。

昼食後に、ジョージワトソンカレッジラグビースタジアムに移動し、U15 長崎県選抜対U15 エディンバラ代表チームとの交流試合を観戦。もちろん、試合や練習の経験は子どもたちの自信になると思うが、試合後にそれぞれ分かれてホームステイした子どもたちは、英語を話すことの重要性を身をもって感じ、得ることのできた最も大きな経験の一つであったと思う。私が取り組んでいる「英語でおもてなしができるまち長崎」の実現に向けて、今後取り組んでいきたいと改めて感じました。

交流試合を一緒に観戦いただいた松永在エディンバラ日本国総領事主催のレセプションに総領事館を訪問。早めの夕食をとり、ラグビー協会の招待によりミリタリー・タトゥを視察することができた。軍楽隊によるバグパイプ演奏とエディンバラ城を背景に、光と音の演出は素晴らしかった。このために毎年設置される仮設スタンドは満員で、会場を見渡すことができる席を準備いただいたスコットランドラグビー協会の皆様に改めて感謝したい。

翌朝、歴史と伝統のあるスタジアム、マレーフィールドに向かい、今回訪問の目的の一つである2019ラグビーワールドカップの事前キャンプの調印式に出席した。今後さらに、ラグビーだけでなく多方面でスコットランドとの交流が進展することを期待するとともに、市議会としても行政とともに取り組んでいきたいと思いました。

スタジアム見学後には、スコットランドを象徴するエディンバラ城を視察し、訪問日程の最後は、スコットランドラグビー協会主催レセプションとなり、最後には蛍の光を全員で合唱するなど、心のこもった親しみを感じるレセプションでした。

今回、トーマス・グラバーとの歴史的なつながりがあるアバディーン市との市民レベルで培われてきた友好の強さを感じ、そしてラグビーを通してスコットランドとの新たな友好、交流関係がさらに強化されたことを実感し、この関係をさらに深化させていくことが今後の長崎市の発展につながるものと強く感じた視察でありました。

また、先に述べたとおり、英会話の重要性、特に、国際都市長崎を目指す本市にとって、最大のおもてなしが会話であるとの思いを強く感じたことは言うまでもありませんでした。